

『金責めロリ姫エリナ』

ドSロリが

クラスの男子を金責め支配！



金責めロリ姫エリナ

玉子王子 著

## 1章 転校生の得意は金蹴り クラスの覇権争いに逆転の一手

七月。

学校の外では蝉が鳴いていた。

「なんで譲らなくちゃならないのよ！ こんなデブに！」

後半は絶対いらなと思うような台詞を思い切り吐く少女。

後藤田エリナ。

祖父はうさぎ新聞とうさぎ新聞ラビッツのオーナーだが、子供の世界ではどうでもいい話だった。

今日このうさぎ〇学校に転校して来た。1×歳、Y年生。

この学校は〇学校ですでに制服であることからわかるとおり、金持ちが通うタイプの学校である。が、それで振る舞いが大人になるわけでもない。

エリナの叫びに、隣の女子が青ざめる。

「ダメだよエリナちゃん、うちのクラスでは、男子に譲らないと。っていうか、学校全体的にだけど……」

「なーによそれ！ キ〇タマ付いてりゃ偉いっての！？」

エリナはまごうことなき美少女である。

黒髪をツインテールにして、目はやや吊り目気味。柔らかそうな頬はばら色と言える血色のよさ、まだ胸より腹が出ているかわいらしい体型。

しかも、制服が間に合わなかったのでひらひらのフリルつきのワンピースドレス姿である。

かわいいを絵に描いたような姿。

それが平然とキ〇タマと絶叫する姿に、周囲は一瞬度肝を抜かれる。

「っていうか、あんたら三人でボール遊びするだけで、私たちにどけてどういうことよ？ っていうか教室でボール遊びしてんじゃねー、自分のボールでもニギニギしてな！」

「うるせえな転校生！」

「そうだ、大体何だよその服！ 自分だけ目立とうとしやがって！」

「エリナちゃんもういこうよ」

「そうだ、とつとどっかいつちまえよ！」

「女子は引っ込んでろって！」

「へ……そんなに男子が偉いんだ」

「そうだよ。このクラスは俺たち男子の物なんだよ！」

エリナの周りの女子は七人ほどで、デブを中心とした三人の男子よりはるかに多いが、まったく争う気を見せない。

肩をすくめるエリナ。

「そういうことなら、仕方ないわね」

ポン、とデブの肩を叩く。

「へ.....そんなに男子が偉いんだ」  
「そうだよ。このクラスは俺たち男子の物なんだよ！」  
エリナの周りの女子は七人ほどで、デブを中心とした三人の男子よりはるかに多いが、まったく争う気を見せない。  
肩をすくめるエリナ。  
「そういうことなら、仕方ないわね」  
ポン、とデブの肩を叩く。



「そのとお.....ほごっ！」  
ゴチャっ、と音を立てて、特に手加減の欠片もないエリナの膝蹴りがデブの股間に減り込んでいた。

「はんぐううう」

「あはははは！ 偉いき○タマが大変だねえ！  
男なんて威張ってても、キンちゃん蹴られたらイチコロよイチコロ。見なさいよこれ、よわっちい女の子に蹴られて、はんぐうだって！」

その場に蹲り、股間を押さえてまるまるデブ。  
見下ろすエリナに、周囲は青ざめる。

「そのとお.....ほごっ！」

ゴチャっ、と音を立てて、特に手加減の欠片もないエリナの膝蹴りがデブの股間に減り込んでいた。

「はんぐううう」

歯を剥きながら、呻くように叫ぶデブ。

「あはははは！ 偉いき○タマが大変だねえ！ 男なんて威張ってても、キンちゃん蹴られたらイチコロよ、イチコロ。見なさいよこれ、よわっちい女の子に蹴られて、はんぐうだって！」

その場に蹲り、股間を押さえてまるまるデブ。

見下ろすエリナに、周囲は青ざめる。

「ああっ、そこはダメだよエリナちゃん！ タマタマは！」

「ん？」

「そ、そうだぞ、卑怯だぞ！」

口々に叫び、エリナに詰め寄る男子二人。

それをハエでも追うようにパタパタと手を振るエリナ。

「卑怯？ 笑わせるわね」

「はうっ！」

ギュム。

エリナの小さな手が少年の制服の股座を握る。もちろん、その中の雄玉もだ。

「え、エリナちゃん！」

「キ〇タマ狙うのは卑怯？ それは違うわよ。いい？ 男が何で力が強いのかっていったら、キ〇タマついてるからなのよ」



「キ〇タマ狙うのは卑怯？ それは違うわよ。  
いい？ 男が何で力が強いのかっていったら、  
キ〇タマついてるからなのよ」

「これのおかげで、男子は力が強い。  
その力で女子に勝手なことするのはありで、  
女子がそれに対抗しようとして  
キ〇タマ狙うのは卑怯ってどうよ？」

頷いたり同意の声を挙げる周囲に、  
腹の中で舌を出すエリナ。

——皆適当ね。どう見ても男子の方が小柄でしょ？

私たちの年じゃキ〇タマは  
ただ弱点としてぶら下がってるだけで  
何のアドバンテージにもなってないって。

しかし、それを言うメリットはエリナにはない。  
だからただ黙っている。

ギュ、と強く握る。

なす術がない握られ男子。

もう一人も、仲間の急所が人質では動きようがない。

モミモミ、と細い指をピアノでも弾くようにうねらせるエリナ。

そうしつつ、そこは見ていない。

男子や、周りの女子たちを見回す。

揉んでいるのは、別に理由はなく、ただの本能的な動きのようだった。

「これのおかげで、男子は力が強い。その力で女子に勝手なことするのはありで、女子がそれに対抗しようとしてキ〇タマ狙うのは卑怯ってどうよ？」

言われてみるとその通りの気がする周囲。

もちろん間違いだ。

エリナたちの年齢ならまだ女子の方が背が高いし、力も強い。

実際、この場にいる女子たちのなかで、男子三人より背が低いものは二人ぐらいしかいない。

力では女子の方が勝っているのだ。

その上でさらに急所まで狙ってこられては男子に勝ち目などない。

男性ホルモンによって多少気が荒くて争いに向くかもしれない、という精神的な部分でワンチャンあるだけだろう。

だが、その場の者たちは漠然と男の方が力があると思込み、疑っていない。

そのため、エリナの話も間違っていない気がした。

頷いたり同意の声を挙げる周囲に、腹の中で舌を出すエリナ。

——皆適当ね。どう見ても男子の方が小柄でしょ？ 私たちの年じゃキ○タマはただ弱点としてぶら下がってるだけで何のアドバンテージにもなってないって。

しかし、それを言うメリットはエリナにはない。

だからただ黙っている。

「そ、そうだよ。キンちゃん狙ってもいいんだ」

「ちょ、待てよ。潰れたらどうするんだよ」

「今はナノテクで一日で治るから平気平気」

笑って手を振るエリナ。

その顔は、まるっきり本気だった。

唾を飲む男子二人。特に握られているほうは。

と、手を放すエリナ。

慌てて下がり、股間を押さえる。

仲間も同じように庇う。

デブが、何とか立ち上がる。

涙と鼻水で顔がグチャグチャだ。

「お、お前ゆるさねえからな。皆でボコってやるよ」

「それでもキ○タマついてるの？ 女の子相手にみんなでボコってやるよって……」

「う、うるせ！ キ○タマ蹴られていい顔できるか！」

股間を庇いつつ、三人でエリナを囲みにいく男子。

それを見ている、女子たちは何もいえない。

いや、そうでもなかった。

「……やめなさいよ」

ボブカットの制服女子。

マリ、という名なのをもうエリナは覚えていた。

「なんだと！ 俺らに逆らうつもりかよ！」

「男子に勝てるつもりかよ！ 俺たちは何とかなっても、男子全部と争うんだぞ！」

「くっ」

「うふふ、勝てるでしょそりゃ」

腕を組み、笑うエリナ。

「そっただけキ○タマという弱点ぶら下げてるんだから、集中的に狙っていけばね」

「ま、まてよ。それは卑怯で。なあマリ、言ってやれよ」

「そうだよね。タマタマ狙いは、卑怯だよ」

「そうそう、はぐっ！」

「こんな風にね！」

ボス、と腹を叩くようにフックで、デブの股間に拳を叩き込むマリ。

「おおおおお」

膝を突き、そのまま倒れて転がるデブ。

「みんな、こんなに簡単なのよ。男の子なんて威張っててもタマタマ狙えば、こんなもんなのよ。今こそ立ち上がろうよ！」

顔を見合わせる女子たち。

まだ、一斉に立ち向かおうと言うほどの勢いはない。

エリナを入れて八人を相手にしたらとても勝てないと思っていた男子二人が勢いづく。

「おら！ お前ら二人だけだぞ！」

「そうだね。でも、問題ないでしょ」

「ふざけんな！ 不意打ちでなきゃお前らなんぞ！」

ついに、掴みかかってくる男子。

エリナとマリに一人ずつ。

「さあどうする転校生！ おぐっ！ ……ぐあああ！ キ○タマあああああっ！」

「っていうか、馬鹿でしょ？ 掴みかかったらキ○タマ手で守れないじゃん」

膝蹴り一発、減り込んだ股間をゴリゴリと磨り潰しつつ言う。

「あっ」

エリナの膝金蹴りを横目に見て、慌ててマリから手を放す男子。

その襟首を掴み、ゴチャッと膝蹴りのマリ。そしてそのまま足を踏み込んで、柔らかい背中に乗せて転がすように投げ飛ばす。

「うぐいいいっ！」

床に叩きつけられ、仰け反る男子。

ギュム、とさらに股間を踏みつけるマリ。

流石に勢いよく踏み潰しにはいかないが、スニーカー状の上履きで男の部分の踏みにじる。

「どう？ 参った？」

「ま、まいった、まいったあー！」

泣き声を上げる。

すでに一度股間を蹴られ、投げ飛ばされた上にさらに大事な部分を女子に踏まれているのだ、とても戦い続ける気力はなかった。

「あと、上野だけ」

「ま、参った！ 参った！」

金パンチのダメージから何とか立ち上がり、その場に座り込んでいたデブが慌てて手を振る。

エリナに蹴られた一人も、完全に降参だ。

「勝ったね。まあキ○タマぶら下げた男子の分際で、女子に勝てるわけないんだけどね」

「エリナちゃん……これから大変だけど、がんばろうね」

「そうだね。でも、その前に……」

にい、と歯を見せる。

わりと近くで転がったり座っている男子三人に。

「あんたたち、服脱いで」

「え、何で？」

「おチンチ〇見てやるって言ってんのよ！ 嫌ならもうちょっとキ〇タマ蹴られる？」

「へ、変態だ。チ〇コ見たいなんて……」

「変態って言うか……」

膝立ちのデブを突き飛ばし、ズボンを掴む。

「これはお仕置きなのよ！」

「うわあああっ！ だ、誰か！ 変態が俺のチ〇コを！」

「人聞き悪い！ 私はただ……女子に負けて、チンチ〇見られたら男子は大人しくなるから……そのために見てやるって言うてるだけ。皆、皆もこの三人に大人しくなって欲しいよね！」

女子たちが顔を見合わせる。

そしてうなづく。

困らされている、というもある。

だが、それだけではない。

ここで頷けば男子との争いに巻き込まれるが、エリナとマリの調子を見ていれば勝てそうだ。

男子にこのまま圧迫され続けるのは嫌である。

そして……

「いつまでも男子の言いなりにはなってもらえないもんね！」

「だから手伝うよ！」

言いつつ、男子三人に群がる。

「さあ、大人しくしなさい！」

「さあ、大人しくしなさい！」  
「それとも、またタマタマ蹴られる？」  
——チンチ〇見られるわ。同級生のチンチ〇！ どういう感じなのかな？  
女子たちは、目を輝かせ、頬を赤くしていた。  
彼女らは戦いへの覚悟や、必要性だけで動いているわけではない。  
むしろ、相当に性的な興味が大きな動機となっていた。

「うわあああ！ やめてくれ！」

「手を押さえて！」

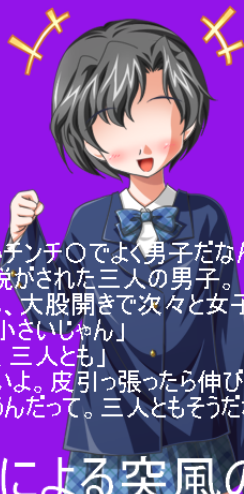
「あは、上野のおチンチ〇小さい！」

「肉に減り込んでみたいだよ」

「ってというか三人とも小さくない？」

「幼稚園の弟でもこのぐらいだよ」

「ぎゃはははは！ じゃあこの年でこれってまずいんじゃない！」



「こんな小さいチンチ〇でよく男子だなんだって威張ってたね」  
転がり、服を脱がされた三人の男子。  
両足を持たれ、大股開きで次々と女子が股間を覗いていく。  
「うわ、マジで小さいじゃん」  
「小指みたい、三人とも」  
「先っぽ面白いよ。皮引っ張ったら伸びそう」  
「包茎って言うんだって。三人ともそうだね」

## 女子による突風のような短小責め。

「それとも、またタマタマ蹴られる？」

——チンチ〇見られるわ。同級生のチンチ〇！ どういう感じなのかな？

女子たちは、目を輝かせ、頬を赤くしていた。

彼女らは戦いへの覚悟や、必要性だけで動いているわけではない。

むしろ、相当に性的な興味が大きな動機となっていた。

「うわあああ！ やめてくれ！」

「手を押さえて！」

「あは、上野のおチンチ〇小さい！」

「肉に減り込んでみたいだよ」

「ってというか三人とも小さくない？」

「幼稚園の弟でもこのぐらいだよ」

「ぎゃはははは！ じゃあこの年でこれってまずいんじゃない！」

「こんな小さいチンチ〇でよく男子だなんだって威張ってたね」

転がり、服を脱がされた三人の男子。

両足を持たれ、大股開きで次々と女子が股間を覗いていく。

「うわ、マジで小さいじゃん」

「小指みたい、三人とも」

「先っぽ面白いよ。皮引っ張ったら伸びそう」



「包莖って言うんだって。三人ともそうだね」

女子による突風のような短小責め。

「う、うわあっ！」

叫び、暴れだす一人。

男として耐えられなかったようだ。

が、すぐに肩を押さえられ、動きを止められる。

そうして、足を引っ張られ、間にエリナが入る。

「ちょっと、大人しくしてもらおうかな」

「あ、わかった……おぐっ！」

なぜか片方の上履きを脱ぎ、素足で股間を押さえる。

そして、激しく震動させる。

「おおおおおおおっ！」

「くらえ！ 必殺電気あんま！」

「やっちゃえ！」

「キ〇タマ潰しよ！」

「女子に意地悪ばかりするからよ！」

「そうそう、ここでキ〇タマ潰されて当然よね！」

本気で潰されるなどと、誰も思っていない。

が、身動きできない状態で電気あんまを食らい、潰せ潰せといわれる恐怖に、むしろ横で見ている上野たちが震え上がる。

と、長いピンク色の髪の少女が上野の肉玉に触れる。

「や、やめ……」

「アイ、汚いよ」

短小責めよりある意味グサッと来る気もする発言を平然とするマリ。

別に気にしないアイ。

「キャンタ〇袋、お兄ちゃんのはもっとプルプルだけどなあ、カチカチじゃない？」

「びびったらタマタマ袋が縮んで固くなるんだよ」

「チンチ〇はプルプルだけどね。お兄ちゃんはカチカチなのに……」

「プルプルって程ないでしょ。っていうか、お兄ちゃんはカチカチって」

「ああ、普段は柔らかいけど、お風呂で洗ってあげるとカチカチに……」

その場の女子全員が一瞬アイを見るが、まあ仲のいい兄妹という事にして、目をそらす。

実際問題、本当に「仲がいい兄妹」なのだろうし。

「それより、皆覚悟はいい？ 男子との戦いは今日からだよ」

「うん、やるよエリナ」

「うふふ、まあ、私がいれば簡単に勝てるね」

励ますとか、自慢する様子ではない。

本気でそう思っているようなエリナ。

電気あんまをやめ、男子三人を立たせる。

「も、もう許して……」

「最後に、写真だね」

「え」

「オチ○チーンの写真撮るってこと」

スマホを取り出す。

他の女子たちも続く。

慌てて、全裸ながら逃げようとする男子三人。

それを見越していたエリナは、素早くスマホを戻して捕まえる。

マリと一緒に、片手ずつ捕まえる。

ほかの二人も、やはりあっさり捕まる。

裸でこの場から逃げ出せないという事情が、あっさり掴まった背景だろう。

アイに上野の手を任せるエリナ。

「それじゃ、改めて大事なおチンチ○の写真、取らせてもらうね。お、キ○タマ弛んできた。上野デカイじゃん、男の大事な金の玉」

「や、やめろよ……おふっ！」

顔を赤らめる上野。褒められた喜びに浸る間もなく、肉玉を握られていた。

グニグニと、力を込め、緩め、優しく握り潰していく。

「え、何してるのエリナちゃん」

攻撃ではないらしい事に気づくマリ。

歯を見せる。

「いいこと。お、もう立ってきた」

上野の一物がビクビクし始める。

ポケットから、なぜか持っていたビニールのメジャーを取り出す。

「おお、かなりデッカイよ。縮んだら短小包茎に見えたのにね」

「え、まさか……」

「うふふ、そのまさか。立った状態で、物差し横において写真」

震える男子たち。

「え、それって凄いこと？」

「凄いよ。こいつのチンチ○何センチ、とかいえるもん」

「いえたらなんなの？」

「私みたいな大人の女になればわかるよ」

根っからの処女が、経験豊富な顔をする。

「いやだっ！ 誰か来て！」

「押さえて」

女子たちに寄ってたかってその場に直立不動の姿勢にされる男子三人。

すでにギン立ちの上野にメジャーを当てるエリナ。

「さ、撮って」

女子たちに寄ってたかってその場に直立不動の姿勢にされる男子三人。  
すでにギン立ちの上野にメジャーを当てるエリナ。

「さ、撮って」

シャッターが切られる。

普通に写し、ついでチョコキで立ったモノを挟んで横で笑顔を見せるエリナ。  
ついで、肉玉を握る。



「キャンプシヨンは「完全支配」ってところね」

モミモミ、と肉玉を揉みあげるエリナ。

青ざめ震える上野。

それでも、一物は緊張のせいかギンギンのままだった。

シャッターが切られる。

普通に写し、ついでチョコキで立ったモノを挟んで横で笑顔を見せるエリナ。

ついで、肉玉を握る。

「キャンプシヨンは「完全支配」ってところね」

モミモミ、と肉玉を揉みあげるエリナ。

青ざめ震える上野。それでも、一物は緊張のせいかギンギンのままだった。

他の二人にも同じようにして、やっとなんか解放する。

と、そこに騒ぎを聞きつけたクラスの人間がどっと集まってくる。

元々、もうすぐ授業が始まるので戻ってきてはいたのだ。

それが騒ぎで早まった。

そういう形なので、クラスのほとんどが教室に集まる形になった。

全裸の男子三人を見て、はじめは笑っていた男子たち。

だが、男子と女子の争いの流れでそうなったと知ると、顔色を変える。

「お前ら、女子の癖に生意気だぞ！」

言うのは、かなりイケメンの部類の男子だった。

「キ○タマ蹴り甲斐ありそうじゃん」

小声で言ってから、クラスのリーダーであるイケメン男子の前に立つエリナ。

女子は大抵男子より体格がいいが、エリナはむしろ下級生に見られるほど小柄だ。

そしてイケメンは大柄なので、エリナが見下ろされる形になる。

「転校生、お前が唆したんだな」

男女がそれぞれ二十人ずつ。

しかし、全裸の三人を除いて全員一様は女子と戦おうとしている男子と違い、女子で戦う気はエリナたち八人だけだ。

多くの女子は端のほうで元から小さいのに、さらに小さくなっている。

「唆すって何よ」

「女子が俺たちに逆らうわけないんだよ。男子によ」

「そうだそうだ、お前が騙したんだろ」

次々と罵声を浴びせてくる男子たち。

頬を緩めるエリナ。

「へえ、上手いことやってるのね」

チラ、と余所見をする。

次の瞬間、しゃがむ。

「でも……」

「あっ」

イケメンの下、スパッツを掴み、引き下げるエリナ。

「うわっ！」

「プルン、ってキ○タマ揺れたよ！」

「や、やめろ！」

真っ赤になってスパッツを取り返そうとするイケメン。

それを突き飛ばす。足にスパッツが絡んだ状態でバランスを取れるわけがない、ひっくり返るイケメン。

そのスパッツと、中のパンツを奪って走り出すエリナ。

真っ赤な顔で跳ね起き、追いかけるイケメン。

「きゃああ！ 関くんのおチンチ○が！」

「酷いよレイナちゃん！ 関くんのチンチ○プルプルしてるよ！」

戦う気のない女子たちが口々に非難を浴びせつつ、イケメンの股間を凝視する。

文句を言うぐらいなら見なければいいのだが、全員が揺れる肉根と雄玉から目を放せない。

それは相手がクラスのリーダー的イケメンだから、というだけではないだろう。

男女の体の差に興味を持ちつつある年齢である。

その前を、イケメンが走る。

「返せ！ この変態女！」

わめいて走る。

ブルンブルン肉玉が震える。

と、その背後にマリが割り込む。

腕の下に自分の腕を突っ込み、羽交い絞めにする。

「ああっ！ ま、マリなにを……あっ」

いつの間にか戻ってきていたエリナが、イケメンの股間に顔を近づける形でしゃがむ。  
まだプルプルと震えている肉の塊を舐めるように見る。

「ふむふむ、今までいっぱいチンチ〇見てきた大人の私からすると……」

ムニ、と皮に包まれた一物を摘まむ。

「緩んでこれはかなり小さいよ。こんなチンチ〇の小さい奴の下でいいの、皆？」

「うるせー！ お前はついてないだろ！」

「ん？」

「小さい以前に、チ〇ポついてないだろって言ってんだ！」

「そうだそうだ！ チ〇コもない奴は黙ってろ！」

ヒク、と頬を引きつらせるエリナ。

と、関の周りに立っていた男子が走ってくる。途中で下を脱ぎ捨てて、ブルブル震わせてくる。

「ほら、見たいなら見せてやるよ！ 関だけフルチンにさせるかよ！」

「お、お前ら……」

羽交い絞めでフルチンで、短小責めを喰らって心が折れかけていた関が、目を輝かせる。

グイ、とエリナに股間を突き出す男子たち。

腰を振り、小ぶりなものを器用に左右に振る。

「どうだ、これがチ〇コだ！ これがない奴は黙って……はうっ！」

二人の男子の肉玉を掴むエリナ。

「チンチ〇ついてるからって威張るなよ。こんなもん……」

両手でニギニギ。

腰を引く形をするが、肉玉を掴まれてはその部分は動かさない。

他の男子たちが我ことのように膝を締め、真っ青で叫ぶ。

「お、お前やめろ！」

皆、パンツの中で肉玉が音を立てて縮み上がるのを感じていた。

先ほどエリナが敵の男子を金蹴りの上にフルチンにした事は聞いている。

それを思えば、握った玉をどうするつもりか知れない。

言われて、エリナは歯を見せる。

「んー？ この二人に、男やめろって言ってるの？」

掴まれた二人の一物がさらに縮み上がり、皮の中に萎みあがる。

茂みなど一切ないので、まるっきり丸出しである。

「ち、違う」

「冗談だよー。タマタマ潰したりするわけないでしょ？ うふふ、しないよ？ しないんだ」

できるけどしない、と臭わせる。

男子二人の息が荒くなる。

同級生、それも美少女の手に命を握られ、身動きできない状況。

その極限状況が彼らの脳に誤作動を起す。

縮んでいた一物が急速に弛む。

いや、むしろ膨らむ。

ビクビクと、脈動と共に膨れ上がる。

その震動が手に伝わって、目を向けるエリナ。

「あーっ！ チ○ポビンビンに立ってんじゃない！」

美少女らしい台詞を絶叫する。

「み、見るな！」

「うわー！ チ○ポじゃない！ チ○ポじゃない！」

真っ赤な顔で手を振り、エリナの手の上に屹立する自分の分身を覆い隠す二人の男。

「ゲラゲラゲラゲラゲラゲラゲラゲラ！ 意味わからないから！ どう見てもチ○ポでしょうが！」

体を痙攣させるエリナ。涎を飛ばして笑いまくる。

肉玉を握った状態でそれほど笑われると恐怖でしかないが、それでも分身は萎えない。

と、チャイムが鳴る。

どんな喧嘩だろうが、授業が始まれば手打ち。

○学生にとって、それは当たり前のことだった。

ちょうど、四時間目である。

次の休みは昼休みだ。

激しい戦いが予想された。

体験版終

これから更なるドSロリエリナによる金責めと  
プールでフルチン祭りというCFNM展開が待っています

気になった方は製品版をよろしく願いたします